

# 『源経氏歌集』 四季部注釈稿 (中) 承前

## 鹿野しのぶ

本稿は『源経氏歌集』四季部注釈稿(上)の続稿(夏歌から秋歌一五〇番歌まで)である。凡例は前稿にしたがう。

### 夏歌

#### 更衣

七二 桜色のかた見はかへつ夏衣なつしほせうすくや花に心そめけむ

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「更衣」。堀河百首題。

【口語訳】 桜色の春の形見はあつさり替えてしまった。夏衣は薄く花に心を染めたのだろうか。

【語釈】 ●かた見―春の「形見」と夏衣の「片身」を掛ける。 ●かへつ―「替ふ」は取り替えるの意。「つ」は意識的な完了の意の助動詞の終止形で三句切れ。 ●うすくや―「夏衣」の縁語。生地の薄い様子と色の薄さの両方の意味を掛ける。「や」は疑問の意の係助詞。 ●心そめけむ―「染む」は「(色を)染める」の意に、「(桜)に対し

て）深く心を寄せる」の意を響かせるか。「けむ」は過去推量の助動詞の連体形で「や」を受けて係り結び。

【参考】本歌「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちのかたみに」（『古今集』春上・六六・「題しらず」・紀有朋）

七三 色見えぬ人の心の花染めもうつりやしぬるかはる袂に

【合点】善成

【詞書】七二番歌「更衣」題を受ける。

【口語訳】表立って見せないうつろいやすい人の心の花に似て、花の色に染めた袂も移り替ってしまったのだから。衣替えをした夏の袂に。

【語釈】●色——（表に現れて何とない感じを見せる）けはい、様子。●人の心の花染め——「人の心の花」から「花染め」へと続く表現。「人の心の花」は花のうつろいやすさに人の心の変わりやすさをたとえている。「花染め」は露草の花の汁で染めること。変色しやすいことから、うつろいやすいものたとえにもなる。ここでの「花」は春の花で桜を指している。●うつりやしぬる——「うつる」に衣を替える、更衣の意に、色が「映る」と衣の色が変わるという意を込める。「や」は疑問の係助詞。「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形で係り結び。

【参考】「をりふしもうつればかへつ世の中の人の心の花染めの袖」（『新古今集』夏・一七九・「夏の初めの歌とてよみ侍ける」・俊成女）

## 余花

七四 おのづから残る木ずゑも見えぬまで散りにし花の跡ぞしげれる

【合点】 なし。

【詞書】 「余花」。『千首』題。

【口語訳】 たまたま花が残っている梢も見えなくなるほど散ってしまった花の跡に新緑が茂っている。

【語釈】 ●見えぬまで―「まで」は程度を表す副助詞。見えなくなるほど。●花の跡ぞしげれる―「ぞ」は強意の係助詞。「しげれる」は連体形で係り結び。「しげる」は新緑が繁っている。【参考】 後撰集歌で、桜が散った後の葉の緑が繁る様子から満開の桜を想起することとしたことを踏まえて、新緑が繁る梢に花の跡を見ると詠んでい

【参考】 「匂ひつつ散りにし花ぞ思ほゆる夏は緑の葉のみ繁れば」（『後撰集』夏・一六五）

## 卯花隠路

七五 さらにだにとはれぬ庭のかよひぢにあとなき雪と咲ける卯の花

【合点】 善成

【詞書】 「卯花、路を隠す」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略)卯花は雪の色、月の光にまがへてもよめり。名所には卯花山、玉川里、小野にもよめり。此の題の心、うの花の咲きみちて人の通路を埋みたる躰なり。庭ならで山路の事もよむなり。」とある。

【口語訳】 そうでなくてさえ訪れられない庭の通い路に跡をとどめない雪だと咲いている卯花よ。

【語釈】●さらでだに―動詞「然り」の未然形に打消の接続助詞「で」に類推の副助詞「だに」。ただでさえ、の意。●とはれぬ庭の―訪問者のいない庭。●かよひぢにあとなき雪―雪であれば人が通った跡もつくが、卯の花が路を隠しているので跡はつかない。「隠」の文字を「まはして」詠んでいる。●卯の花―【参考】後撰集歌のように卯の花を雪に見立てた。

【参考】「時わかず降れる雪かと見るまでに垣根もたわに咲ける卯花」（『後撰集』夏・一五三・「卯花の垣根ある家にて」・読人しらず）

## 待郭公

七六 ほととぎすいつまで忍ぶ初音とて待つ夜むなしき数をそふらむ

【合点】 為重・善成・耕雲

【詞書】「待つ郭公」。『千首』題。

【口語訳】 ホトトギスはいつまで忍んでいるのか。初音といって待つ夜に空しく数を加えているのだろう。

【語釈】 ●いつまで忍ぶ―「忍ぶ」は終止形で、二句切れ。●初音とて―「初音」はホトトギスの初鳴きのこと。

【とて】は格助詞「と」と接続助詞「て」の連語。●数をそふらむ―「添ふ」は他動詞下二段活用。「らむ」は現在推量の意の助動詞。初音を待つ夜の日数を数える、ということ。

【参考】「郭公しのぶ比とは知りながらいかに待たるる初音なるらん」（『続拾遺集』夏・一四九・衣笠家良）

七七 深山路はうき世ならぬをほととぎすなどか初音のいでがてにする

【合点】 なし。

【詞書】 七六番歌「待郭公」を受ける。

【口語訳】 深山の奥深い道はつらい世ではないものを、ホトトギスは どうして初音が出ることをためらっているのだろうか。

【語釈】 ●うき世ならぬを―【参考】 本歌の「つらい世の中」を踏まえる。●いでがてに―出ることができるという意の「いでかつ」。これに打消の助動詞の古い連用形「に」で、出ることをためらう。出ていきがたい。

【参考】 本歌「うき世にはかどさせりとも見えなくになどか我が身のいでがてにする」(『古今集』雑下・九六四・「つかさ解けて侍りける時よめる」・平定文)

七八 なべて待つ里わきかねてほととぎす中音をやらしわぶらむ

【合点】 善成

【詞書】 七六番歌「待郭公」を受ける。

【口語訳】 総じて待っている里を区別しかねて、ホトトギスはなまじつか鳴きかねているのだろう。

【語釈】 ●なべて―おしなべて、概して。●音をやらしわぶらむ―鳴き声を漏らしづらいのだろう、の意。

【参考】 「なべて世にまたるる比の時鳥さぞしのびねはもらしかぬらん」(『新拾遺集』夏・二〇八・「貞和二年百首歌奉りし時」・藤原為明)

岡郭公

七九 岡辺なるまつにつれなき日数へいつともわかぬほととぎすかな

【合点】 善成

【詞書】 「岡の郭公」。『千首』題。

【口語訳】 岡のほとりにある松ではないが本当は心待ちにしていたのに、そしらぬふりして日数を過ごしていつ鳴くとも分からないホトトギスだな。

【語釈】 ●まつ―「松」と「待つ」とを掛ける。

【参考】 「ほととぎす来鳴きとよもす岡辺なる藤波見には君は来じとや」（『万葉集』卷十・夏相聞・一九九一）

【補説】 万葉歌の第五句「君は来じとや」と訪れない恋人をホトトギスに重ねて詠じた。

百首歌よみ侍るとて

八〇 音をしのぶ心もたへじほととぎす村雨わたる夕暮の空

【合点】 良基

【詞書】 「百首歌を詠みました、とって」。百首歌の詠歌年時は未詳。

【口語訳】 ホトトギスは鳴き声を包み隠している気持ちもこらえきれないだろう、にわか雨が通り過ぎてゆく夕暮れの空では。

【語釈】 ●音をしのぶ―鳴き声を包み隠す。「忍び音」は四月にまだ姿を見せずにホトトギスが鳴くこと。「音をしのぶ」という表現の他例はいずれも「螢という鳴かない虫に対して鳴き声を隠している」と詠んでいるが、当

該歌ではホトトギスに対していう。●たへじ―「堪ふ」の未然形に打消推量の「じ」。●村雨わたる―先行例は「雲かかる高ねのひばら音立てて村雨わたる秋の山本」(『玉葉集』秋下・七二六・宗尊親王)の他、管見に及ばない。  
 【参考】「忍び音や君もなくならむかひもなき死出の田長に心かよはば」(『源氏物語』蜻蛉・薫)

初郭公

八一 時鳥たがためとてか待ちわぶるこの里遠く音をもらすらん

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「初郭公」。

【口語訳】 ホトトギスは誰のためとって待ちわびているのか。この里から遠く離れて鳴き声を漏らすのだろう。

【語釈】 ●たがためとてか待ちわぶる―疑問の係助詞「か」と「待ちわぶる」の連体形で係り結びとなり、三句切れ。

【参考】 「時鳥五月待つ間にしのびきて心やすくや音をもらすらん」(『為家一夜百首』「五月郭公」・二四)

八二 過(ぎ)やらでしばし語へほととぎす待つとていづるはつなりせば

【合点】 為遠

【詞書】 八一番歌「初郭公」を受ける。

【口語訳】 通り過ぎることなく、少しの間でよいので語らっておくれ、ホトトギスよ。長い間待っていてようやく聞こえた初(音)なのだから。

【語釈】●過ぎやらで―「過ぎやる」は通り過ぎてしまふの意。「で」は打消の接続助詞。●第五句―本文は「はつなりせば」とあるが、「初音なりせば」と判断し、「ね（音）」を補って口語訳を付した。

【参考】「過ぎやらで語らふほどに時鳥聞くやいかにと誰に告げまし」（『自葉集』一一三・中臣祐臣）

### 郭公数声

八三 一声をそれかとたどる雲まより重ねて名乗る時鳥かな

【合点】 为重・善成

【詞書】「郭公、数声」。『新後拾遺集』（夏・二〇一）に「上の男ども、郭公数声といふことをつかうまつりけるに」という詞書で義満の「幾声と数へむものを時鳥鳴きつとばかり何思ひけん」という歌がみえる。『晴月集』（夏・一五）には「永徳元年五月五日公宴和歌御会三首の中に、郭公数声」と見える。「数声」は二声三声の意。

【口語訳】 一声をそれかと辿ってみると、雲間から重ねて名乗っているホトトギスだな。

【語釈】 ●一声―たった一度、聞いた鳴き声。●重ねて名乗る―ホトトギスが繰り返し返し鳴いている様子。

【参考】「一声はさだかならずと思ふ間にかさねて名のる時鳥かな」（『菊葉集』夏・三五五・読人しらず）

### 雨中郭公

八四 つれづれのことやとふらむほととぎす晴れぬながめの夕暮の空

【合点】 善成

【詞書】「雨中の郭公」。『千首』題。

【口語訳】 ホトトギスは物憂いのだろうと思つて訪れるのだろうか。晴れず長雨で物思いにふける夕暮れの空に。

【語釈】 ●つれづれの―物憂く寂しい気持ち。●ことやとふらむ―疑問の係助詞「や」と現在推量の助動詞「らむ」の連体形で係り結びとなり、二句切れ。●ながめ―「長雨」と「眺め」とを掛ける。

【参考】 「つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかけける」(『後撰集』夏・一八五)

〔雲外〕  
曙郭公

八五 ほととぎす雲のほかなる一声こゑに又まどろまぬ空ぞあけゆく

【合点】 為重

【詞書】 本文は「雲外」をミセケチして「曙郭公」としている。いずれも『千首』題。「雲外」は雲のはるかかなた。

【口語訳】 ホトトギスの、雲のさらに彼方から聞こえる一声に、ふたたびまどろみもせず空が明けてゆく。

【語釈】 ●雲のほかなる―削除前の題「雲外」をそのまま和語にした表現。「ほととぎすききつとや思ふ五月雨の雲のほかなる夜半の一声」(『新勅撰集』夏・一七三・「題しらず」・慈円)。●一声―八三番歌【語釈】参照。●まどろまぬ―うとうとすることもできず。●空ぞあけゆく―強意の係助詞「ぞ」と「明け行く」の連体形で係り結び。夜が次第次第に明けてゆく様子を表す。題の「曙」を表現。

【参考】 「一声ノ山鳥、曙雲ノ外 万点ノ水蛭、秋草ノ中」(『和漢朗詠集』夏・一八二・「郭公」・許渾)、「宵の間はまどろみなましほととぎすあけてきなくとかねてしりせば」(『後拾遺集』夏・一八七・「題不知」・橘資成)

## 聞郭公

八六 たがためにこの里すぎてほととぎすいま一声こゑの遠とをざかるらむ

【合点】 善成

【詞書】 「聞く郭公」。

【口語訳】 ホトトギスは誰のためにこの里を過ぎてゆくのか、今一声が遠ざかってゆくことだろう。

【語釈】 ●いま一声―「一声」は八三番歌【語釈】参照。●遠ざかるらむ―「らむ」は未来の事態を推量する意。

【参考】 「おのが音はたがためとてもやすらはず鳴き捨ててゆくほととぎすかな」（『為定集』三二）

## 挿葵

八七 神まつるけふこそ見つれあふひ草なべてかけけるたのみなりとは

【合点】 善成

【詞書】 「挿かひす葵」。

【口語訳】 神事が行われる今日、必ず見るのですね。葵草を総じて掛けているのは神の恵みを期待しているためなのだと。

【語釈】 ●神まつる―賀茂祭を指す。●けふこそ見つれ―強意の係助詞「こそ」と強意の助動詞「つ」の已然形で係り結びとなり、二句切れ。●あふひ草―「あふひ」に「葵」と「会ふ日」とを掛ける。●かけける―「葵を」掛ける」と「頼みを」懸ける」とを掛ける。

【参考】 「神まつるけふのみあれのかざし草ながきよかけてわれやたのまむ」（『夫木抄』夏・二四七八・藤原資季）

菖蒲

八八 軒端葉なるあやめのつゆも玉だれの小簾こすの間まかけてかほをる今日かな

【合点】 花町

【詞書】 「菖蒲」。堀河百首題。

【口語訳】 軒端にある菖蒲にかかったほんの少しの露も玉でかざった簾のように小簾の隙間から薫る今日この日であるよ。

【語釈】 ●つゆも―「露」と「つゆ（副詞）」とを掛ける。●玉だれのこすのま―露を玉簾に見立てる。『西京雜記』（二）に「珠を織りて簾と為す」とある「珠簾」を模した表現。

【参考】 「あやめふくかやが軒ばに風過ぎてしどろにおつるむらさめの露」（『玉葉集』夏・三四五・後鳥羽院）

廬橘

八九 袖かけて花橘たちばなはにほふなり代代むかしの昔むかしをなににうつさむ

【合点】 為遠・善成

【詞書】 「廬橘」。堀河百首題。

【口語訳】 袖に掛けて花橘は匂うようだよ。多くの年月を経た昔を何に移そうというのか。

【語釈】 ●袖かけて―【参考】 本歌を踏まえ、袖に香をたきしめての意。●花橘はにほふなり―強意の係助詞「は」と推定の助動詞「なり」の終止形とで係り結びとなり、三句切れ。●うつさむ―橘の香りを袖に「移す」の意と昔の人の面影を「映す」の意を掛ける。

【参考】本歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今集』夏・一三九・読人しらず）

廬橘驚夢

九〇 ほどもなき夜半をよは残してのこ橘たちばなのかをほる枕まくらにいく寝覚ねざめしつ

【合点】なし。

【詞書】「廬橘、夢驚く」。『和漢兼作集』（四四八）に見える。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「昔の人の袖の香ぞすると、業平の朝臣の読みしより、橘の匂ひには昔を忍ぶとよめり。此の題の心、軒ちかきにはほひにおどろきて、短か夜の夢のさめやすきをいふなり。」とある。

【口語訳】残り短い夜半の時を残して橘が香る枕に幾夜目を覚ましたことか。

【参考】八九番歌参照。「橘のかをるあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ」（『源氏物語』〈蜻蛉〉・匂宮）

【補説】当該歌では「驚」と「夢」を「まはして詠」んでいる。「夢」は多く題詠論で言うところの「必ず詠むべき文字」かと思われ、合点がない所以か。しかし「驚夢」を持つ題の中で『金葉集』（夏・一一五・「郭公驚夢といへることをよめる」・中納言実行）に「おどろかす声なかりせばほととぎすまだうつつには聞かずぞあらまし」（『和歌一字抄』「驚」七六四）という先行例もある。当該歌では「いく寝覚めしつ」で「短夜の夢が覚めやす」い点を表現している。【参考】に挙げた『源氏物語』〈蜻蛉〉に詠まれた匂宮が浮舟の死を知ってまさに夢心地で過ぎた折の様子を踏まえているか。作者の自讃歌である。



く」に「あるらし」が続いた「たゆくあるらし」の縮約形。だるいようだ。「らし」は「や」を受けて連体形となり、係り結びで三句切れ。賤の女の田植えを根拠として「たゆし」と推定している。●たのも―田の面。「頼む」の意を響かせるか。●御注連―田の周辺に引いた注連縄。●長き日影に―夏の長い日の光。「長き」は「御注連縄」と「日影」の両方にかかる。

【参考】「菖蒲ひく賤の袂やたゆからん尋ねかからぬましなければ」（『康資王母集』五七）、「時にあふ千町のなへも今よりや君が齡の数はとらまし」（『為重朝臣詠草』七一）

### 五月雨

九三 いかだ師や避<sup>よ</sup>きし岩<sup>いはま</sup>間<sup>わす</sup>を忘<sup>わす</sup>らんくだる瀬<sup>せ</sup>やすき五月雨の比

【合点】 善成

【詞書】 「五月雨」。堀河百首題。

【口語訳】 筏師よ、避けた岩間を忘れたのだろうか。あつさりと瀬を下る五月雨の頃よ。

【語釈】 ●いかだ師―木材などを運搬する筏を漕ぐ人。●忘らん―「らん」は原因を推量する助動詞。疑問の係助詞「や」を受けて連体形となり、係り結びで三句切れ。●くだる瀬やすき―舟が岩石の多い川上から、岩のない浅瀬の川下へ移動するのはたやすい。川上では岩石が多く漕ぐのに苦労したが、岩の少ない川下では流れに乗って滞りなく舟を漕ぐ様子をいう。●五月雨―「さみだれは、五月のあめとかきたれば、五月に用ゐて四月六月には用ゐる」（『俊頼髓脳』）。なお九四番歌【詞書】参照。

【参考】「杣川や汀を下す筏師もなほ棹ささぬ五月雨のころ」（『自葉集』一一七・「嘉元三年庚申会に、河五月雨」）

## 杜五月雨

九四 岩代いはしろの杜もりの御注連みづめは朽ち果くはててしづくぞたえぬ五月雨の比

【合点】 為遠・善成

【詞書】「杜の五月雨」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「さみだれは日数程ふるものなれば、久しき心を読み。杜と出たらん、何国の名所をもよみて難有るべからず。」とある。

【口語訳】岩代の杜の御注連繩は朽ち果てて、滴が絶えない。五月雨の頃だ。

【語釈】●岩代の杜―「岩代（磐代・磐白とも）」は紀伊国の歌枕。現在の和歌山県日高郡みなべ町岩代。有間皇子が療養のため、紀伊国牟婁温泉に行った際に蘇我赤兄に唆され、謀反を企て、赤足に捕えられた。その送還の途次、藤白坂（和歌山県海南市）で絞殺されたという伝説を想起させる。●御注連―御注連繩。神域を占める。

●しづくぞたえぬ―強意の係助詞「ぞ」と打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」で係り結び。●五月雨―九三番歌

【語釈】参照。五月雨に晒され、物が朽ち果てると詠まれる。

【参考】「岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへりみむ」（『万葉集』卷二・一四一・「有間皇子の自ら傷みて松の枝を結びし歌二首」）「岩代のもりのいはじと思へどもしづくにぬるる身をいかにせん」（『後拾遺集』恋四・七七四・題しらず・恵慶法師）

【補説】有間皇子の伝説を想起させることによって、岩代の杜が長い年月零に、また加えて長く降る五月雨に晒され、御注連繩も朽ち果ててしまったと詠む。

## 五月雨

九五 白露を玉とあざむくはちす葉も濁りにしづむ五月雨の比

【合点】 為重・善成

【詞書】 九三番歌参照。

【口語訳】 五月雨の頃は、白露を美しい石だと見せかけて、極楽浄土にある清纯な蓮の葉もまた濁っては沈む。

【語釈】 ●白露を―本文「しら露の」の「の」を見せ消ちし右傍に「を」と記す。●玉とあざむく―本文「玉しく池の」の「しく池の」を見せ消ちし右傍に「とあざむく」とする。これにより【参考】本歌の摂取が明確となる。「欺く」はだます。漢詩的表現と言われる（小島憲之『国風暗黒時代の文学』塙書房）。●はちす葉も濁りにしづむ―「清らかな蓮の葉もまた」と不確実なものを示す係助詞「も」を受けて「しづむ」は終止形。【補説】参照。

●五月雨の比―倒置となり、これを強調する。

【参考】 本歌「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」（『古今集』夏・一六五・「はちすの露を見てよめる」・僧正遍昭）

【補説】 『法華経』湧出品「不レ染ニマラ世間ノ法ニ、如シ蓮華ノ在ルガ水ニ」によりながら詠まれた本歌を踏まえるため、「玉しく池の」を「玉とあざむく」とした。

九六 五月雨の軒の板間の玉水はもるとも見えぬ苔の下露

【合点】 善成

【詞書】 九五番歌「五月雨」題を受ける。

【口語訳】五月雨の降る軒の隙間の玉のような雨だれは漏れるとも思われない、軒の板間に生えた苔の下露よ。

【語釈】●軒の板間―【参考】参照。●玉水―雨だれの美称。「玉水もしどろの軒のあやめ草五月雨ながらあくっていくよぞ」（『新拾遺集』雑上・一五七〇・「朝五月雨」・藤原定家）。●苔の下露―ここでは、軒の板間に生えた苔に置かれた露が板間の隙間から漏れ落ちることはない、と捉える。

【参考】「ふる里の軒の板間に苔むして思ひしほどはもらぬ月かな」（『平家物語』卷三・少将都帰・康頼入道）

九七 五月雨の晴れぬながめに慰むやとてもさびしき心なるらむ

【合点】良基

【詞書】九五番歌「五月雨」題を受ける。

【口語訳】五月雨が晴れることなく長く降り、物思いにふけて眺めていることに慰められますか、といってもやはりさみしい気持ちなのだろう。

【語釈】●ながめ―「長雨」と「眺め」とを掛ける。●慰むや―「慰む」は「慰み」の受身形で慰められるの意。

「や」は疑問を表す係助詞。●とても―格助詞「とて」に係助詞「も」。「といっても」の意。

【参考】「慰むもあと定まらぬながめかなそなたの空に迷ふ浮雲」（『親清五女集』三六〇）

夏草

九八 思ひなきわが身なりせばしげりあふ葎の宿やすみ憂からまし

【合点】善成

【詞書】「夏草」。永久百首題。

【口語訳】心が安らかな私であったならば、うつそうと繁り合う荒れた葎の宿は住みにくいでしょうね。

【語釈】●思ひなき―心配がない、の意。●わが身なりせば―「せば」は第五句の「まし」と呼応して、反実仮想を表す。●葎の宿―「葎」は蔓草の総称。「葎の宿」は葎の生い茂った、荒れた宿。●すみ憂からまし―住み心地が悪いだろうに。心配事の多い我が身なので、葎の生い茂る荒れた宿に住むことが似つかわしい。

【参考】「とふ人も思ひたえたる山里のさびしきなくはすみうからまし」（『山家集』中・九三七）

### 庭夏草

九九 花見んと植ゑし籬は埋もれてあたりの草ぞなほしげりぬる

【合点】為遠

【詞書】「庭の夏草」。『千首』題。

【口語訳】花を見ようと植えた籬は埋もれて、そのあたりには草がいつそう生い茂ってしまった。

【語釈】●埋もれて―花を見ようとしたところから時が経ち、夏草が生い茂る様子を表す。酒井茂幸「二条派和歌の表現方法―「うづもれて」の詠作史から―」（『和歌文学研究』七八・一九九九年六月）参照。●草ぞなほしげりぬる―強意の係助詞「ぞ」を受ける助動詞「ぬ」は連体形となり、係り結び。「ぬ」は自然の推移を表し、埋もれた籬の周辺の夏草が「なほ」（ますます）生い茂ることを表現。

【参考】「花見んと思はぬしばの籬をもうづむばかりにかかる朝顔」（『続重槐集』五七三・「籬槿」）

## 夏の歌の中に

一〇〇 塵ちりはらふ契やうとくなりぬらむ

【合点】 為重

【詞書】 「夏の歌を詠みました中に」。

【口語訳】 寢床の塵を払うというお約束もいつのことだったか疎くなってしまったようだ。

【語釈】 ●塵はらふ―恋人と疎遠になり、寢床の敷物に溜まった塵を払い、久しぶりに逢うという意。【参考】 後撰集歌参照。

【参考】 「夏の夜はあふ名のみして敷妙の塵払ふ間に明けぞしにける」(『後撰集』夏・一六九・「題しらず」・藤原高経)、「我ならで塵払ふべき人もなしただひとりねの床夏の花」(『文保百首』夏・二〇二三・頓覚)

【補説】 下句は現存せず。概本列帖装の折が二枚分欠落している部分にあったと思われる。

一〇一 夕立のよわると聞けば鳴る神の音も雲井に遠ざかりつつ、

【合点】 なし。

【詞書】 歌題は欠落している。一〇〇番歌 【補説】 参照。「夕立」に関する題かと思われる。

【口語訳】 夕立の雨脚が弱まったと思うと、雷の音も遠くの空に遠ざかってゆくよ。

【語釈】 ●夕立―夏の夕方に急に雲が立ち短い時間で激しく降る大雨。●聞けば―雨音から推測して夕立が弱まっただろうと思う、の意。これを契機として下句の件が継続することを表す。

【参考】 「鳴る神の音はそこもなかりけりくもれる方や夕立のそら」(『新千載集』夏・二九八・「後醍醐院御時武者

所に侍りけるに題をたまはりて歌つかうまつりける時、夕立・平氏村)

【補説】 一〇〇番歌の下句を含む複数首とともに詞書も欠落したと考えられる。

一〇二 雲晴るる日影はもとの空ながら吹く風すずし夕立のあと

【合点】 為重

【詞書】 詠歌内容から一〇一番歌の歌題を受けると思われる。なお、一〇一番歌【詞書】参照。

【口語訳】 雲が晴れて日差しはこれまでと変わらない空だが、吹く風は涼しくなった、夕立の後には。

【語釈】 ●雲晴るる―夕立を降らせた雲が晴れて。●日影はもとの空ながら―「日影」は陽光。「ながら」は逆接の確定条件を表す。「もとの空」は「月やあらぬ春は昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」(『古今集』恋五・七四七・在原業平)に倣った表現。日の光は、これまでと変わらない空だけれども、夕立の後の風は涼しく変化した、という。

【参考】 「涼しさの音を残して吹く風によそに過ぎ行く夕立の雲」(『大山祇神社百首和歌』夏・二九・「夕立」・源頼之)

一〇三 夏の日のかたぶくほどに雲晴れて名残すずし夕立の空

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 一〇二番歌【詞書】参照。

【口語訳】 夏の日差しが西に沈みかけるころになって雲は晴れて、その名残が涼しい夕立の空よ。

【語釈】 ●名残すずしき―『源氏物語』(紅葉賀)で光源氏が「夕立して、名残涼しき宵のまぎれに運明殿のわた

りただずみ歩」いていると源典侍が琵琶を奏でているという場面が描かれる。夕立の名残りが涼しい空、の意。

【参考】「しばし猶もとの日影になりやらでなごりすずしき夕立のそら」(『文保百首』夏・二六二九・津守国冬)

納涼

一〇四 常盤山木ずゑの蝉こゑの声なくは夏をもわかじ松の下風

【合点】 花町

【詞書】 「納涼」。

【口語訳】 常盤山は梢の蝉の声がもし聞こえなかつたら、夏だと分かるまい。松の下風の涼しさで。

【語釈】 ●常盤山―山城国の歌枕。現在の京都市右京区常盤付近の丘をさす。●声なくは―「なくは」は順接仮定表現。形容形「なし」の未然形に接続助詞「は」、あるいは連用形に係助詞「は」と考えられる。【参考】千里歌を踏まえた表現。●夏をもわかじ―「じ」は打消推量の意、終止形。夏であるということをも分からないだろう、の意。

【参考】本歌「鶯の谷よりいづる声なくは春くることをたれかしらまし」(『古今集』春上・一四・大江千里)。「此まに秋をも知らじ常盤山夏こそなけれ松の下風」(『草庵集』四〇二・「等持院贈左大臣家五首、納涼」)

翫

一〇五 夏の夜は鎖ささでのみ寝るぬ榎まきの戸をいかで水鶏くひなのなほ叩たたくらむ

【合点】 善成

【詞書】「翫」。水鶏。永久百首題。

【口語訳】夏の夜は錠を鎖さないで寝る槿の戸を、どうして水鶏は叩くのだろうか、すぐ開くようにしているから叩く必要はない。

【語釈】●夏の夜は鎖さでのみ寝る槿の戸を——「槿の戸をささでもあけぬ夏の夜のうたたねにのみ月をみしまに」（『宝治百首』夏・一〇七八・弁内侍）のように槿の戸を閉ざす間もなく開けてしまう夏の夜の短さを表現。「槿の戸」は「君や来む我や行かむのいさよひに槿の板戸もささず寝にけり」（『古今集』恋四・六九〇・よみ人しらず）のように恋歌に見られる。●いかで——反語の意。●なほ叩くらむ——「なほ」は依然として。「らむ」は現在推量の意。水鶏（クイナ）の「こつこつこ」という鳴き声が戸を叩く音に似ていることをいう。

【参考】「槿の戸もささでやすらふ月かげになにをあかずと叩く水鶏ぞ」（『新勅撰集』雑一・一〇六〇・紫式部）

### 夏祓

一〇六 あさの葉のゆふしでなくは秋風のごよひはなにに通かよひそめまし

【合点】良基

【詞書】「夏祓」。堀河百首題では「荒和祓」と表記。

【口語訳】もし麻の葉の木綿を垂らさないのならば、秋風が夏祓の今夜は何に吹き通り始めるのだろうか。木綿四手に風が吹いている。

【語釈】●あさの葉のゆふしで——夏祓の神事で用いる麻の葉に木綿で作った幣を付ける。木綿四手があるので風が吹き通っていることが分かる。●なくは——一〇四番歌【語釈】参照。●通ひそめまし——「まし」は仮定の意の

「なくては」を受け、反実仮想。もし木綿がなかったならば、秋風はどこを吹き通り始めるのだろうか。

【参考】「褌するあさの葉末のなびくより人の心にかよふ秋風」（『新千載集』夏・三〇八・「宝治二年百首歌奉りける時、六月祓」・俊成女）

## 秋歌

### 早秋

一〇七 夏衣なつころもう「す」き袂たもとに通かよひきてたつことやすき秋の初風

【合点】善成

【詞書】「早秋」。秋の初め。初秋、の意。

【口語訳】暑かった夏に着ていた衣の薄い袂に、吹いてきて、その衣を裁つことはたやすいといわんばかりにその訪れを告げる、秋の初風よ。

【語釈】●夏衣―「うすし」「たもと」「たつ（裁つ）」は夏衣の縁語。●うすき―本文「す」は右傍に補入。●たつことやすき―『古今集』（春下・一三四・凡河内躬恒）にも用例が見られる。「たつ」に「（秋が）立つ」と「（衣を）裁つ」とを掛ける。夏衣が薄いので秋風が通り過ぎることと裁つことが「やすし」とする。

【参考】「散り果てて花のかげなき木のもとにたつことやすき夏衣かな」（『新古今集』夏・一七七・「更衣をよみ侍りける」・慈円）

一〇八 かたしきの袖よりふかき露にまづ葎むぐらの宿やどの秋は来にけり

【合点】 良基

【詞書】 一〇七番歌「早秋」題を受ける。

【口語訳】 独り寝の涙で濡れた袖よりも深く置く露を見て、まず葎の生い茂った貧しい宿に秋は来たのだな。

【語釈】 ●かたしきの袖―自分の袖だけを敷いて寂しく独り寝をする。恋的要素を含む。●葎の宿―葎の生い茂った宿。貧しい荒れ果てた家。

【参考】「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」（『伊勢物語』三段）

### 七夕雲

一〇九 心して雲くもの水脈みおをぞはやからし逢あふ瀬せをいそぐ天あまの河舟

【合点】 為重

【詞書】 「七夕の雲」。『為尹千首』（三二二）にも見える。

【口語訳】 気をつけて、雲が水脈をなして速く流れるらしい。七夕の逢瀬をいそぐ天の川舟よ。

【語釈】 ●心して―第五句「天の河舟」への呼びかけ。●雲の水脈をぞ―【参考】古今歌を踏まえた表現。雲が滲しみになして早く流れる。『新編国歌大観』では「くものみおこそ」とする。●はやからし―「早くあるらし」の約。「らし」は根拠のある推定の意の助動詞。係助詞「ぞ」の結びで連体形。

【参考】 本歌「天の河雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるる」（『古今集』雑上・八八二・読人しらず）

七夕

一一〇 七夕のまれなる中のつらさをも逢（ふ）夜やいとど思ひしるらむ

【合点】 為遠・為重・善成

【詞書】 「七夕」。堀河百首題。

【口語訳】 七夕の稀にしか逢えない間柄というつらさをも、その逢う夜にはひとしお思い知らされるのだろうか。

【語釈】 ●まれなる中―まれにしか会えない仲。ここでは七夕という機会にしか会えない間柄。【参考】 参照。

●下句―疑問の係助詞「や」と原因推量の助動詞「らむ」の連体形で係り結び。

【参考】 「七夕の恋ひやつもりて天の川まれなるなかの淵となるらん」（『続古今集』秋上・三一五・「弘長二年百首に、七夕を」・中務卿親王）

【補説】 会えないことをつらいと思っていたが、一年に一度の待ちかねていた逢瀬の七夕の夜も、その後の別れを思うとかえってつらさを思い知らされるといふ逆説的な表現が評価されたか。

一一一 七夕のたなばた五百いほはた機衣ころもいかにしてかさぬるつまのをまどほをなるらん覧

【合点】 善成

【詞書】 一一〇番歌「七夕」題を受ける。

【口語訳】 織姫が織った五百機衣はなぜ、重ねた褌のように逢えず、妻との逢瀬が間遠になるのだろうか。

【語釈】 ●五百機衣―織姫が多くの機はたで織ったという衣服。よって初句の「七夕」を織姫と解した。●つま―衣の縁語の「褌」と「妻」とを掛ける。

【参考】「七夕の五百機衣まれにきてかさねもあへぬつまやうらみん」(『新千載集』秋上・三四二・後伏見院)

七夕夜深

一一二 更ふけにけりうらめづらしきたなばたの雲こもの衣よの夜半よはの秋風

【合点】 善成

【詞書】「七夕、夜深ふけぬ」。『菊葉集』(秋上・四七四・よみ人しらず)に「七夕夜深といふことを」と見える。

【口語訳】夜が更けてしまったな。すがすがしい織姫の雲の衣を纏わせる夜の秋風はそう思わせるよ。

【語釈】●更けにけり―題の「夜深」を表現。初句切れ。●うらめづらしき―心に珍しいと思う。清新に感じて心ひかれるさまである。「うら」に「衣」の縁語で「裏」を掛ける。●雲の衣―雲を織姫の衣に見立てる。「雲衣ハ范叔ガ羈中ノ贈 風櫓ハ瀟湘ノ浪上ノ舟」(『和漢朗詠集』秋・三二三・具平親王)。『万葉集』(第十・秋雑歌・二〇六三)にも用例を見る。

【参考】「わがせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋の初風」(『古今集』秋上・一七一・読人しらず)

七夕後朝

一一三 帰る「さ」はいそがぬ天あまの川舟かはふねに心ひとつのなにこがるらん

【合点】 善成

【詞書】「七夕の後朝」。永久百首題。

【口語訳】帰り道は急がずにいる天の川舟なのに、自分の考え一つその心で舟を漕ぐということではないが、何

を思い焦がれているのでしよう。

【語釈】●帰るさは—本文「さ」は右傍に補入で示される。逢瀬の帰り道。●心ひとつの—自分の考え一つ。恋しいあの人と共にいたいということ。●こがるらん—川舟の縁語の「漕がる」と、恋人を思い「焦がる」とを掛ける。

【参考】「伊勢の海につりする天のうけなれや心ひとつを定めかねつる」(『古今集』恋一・五〇九・読人しらず)

【補説】「心ひとつ」は恋しい人と共に過ごすにはどうしたらよいか、【参考】に挙げた古今歌の「うけ(浮子)」のように揺れ動く、思い乱れる心をいうか。

### 萩

一一四 うちそよぎなびきもやらで萩の葉はのほかにわたる秋のはつ風

【合点】良基

【詞書】「萩」。堀河百首題。

【口語訳】音を立ててそよぎ靡くこともなく萩の葉にわずかに吹き渡っている秋の初風よ。

【語釈】●なびきもやらで—風になびく萩の葉は音を立てると詠まれるが、「やらで」と打ち消したところに特徴がある。●萩の葉のほかにわたる—「萩の葉」は広く大きな葉であり、それに風が吹き秋の気配を感じ取る。

【参考】「葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」(『万葉集』卷十・二二三八・作者未詳)、「秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし」(『後撰集』恋四・八四六・中務)

一一五 萩の葉の音うちそよぐほどよりも身にしみまざる秋の夕風かぜ

【合点】 為遠

【詞書】 一一四番歌「萩」題を受ける。

【口語訳】 萩の葉が音を立てそよぎ秋の到来を告げている、それよりも、いつそう私の身にしみる秋の夕風よ。

【語釈】 ●萩の葉の音―「吹く風のしるくもあるかな萩の葉のそよぐなかにぞ秋は来にける」(『貫之集』第 四・五二二) のように、萩の葉を吹く音は秋の到来を告げるもの。一一四番歌【語釈】参照。●身にしみまざる―秋の寂しさを一層強く感じる。●秋の夕風―萩の葉と私の身に吹く風。

【参考】「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」(『千載集』秋上・二五九・藤原俊成)

一一六 それとなき眺めはよその夕べにて軒端の萩に秋風ぞ吹く

【合点】 なし。

【詞書】 一一四番歌「萩」題を受ける。

【口語訳】 何ということもない眺めは私とは関わりのない夕暮れの景色であって、軒端の萩には秋風が吹いている。

【語釈】 ●それとなき―それだと決まったものがあるわけではない。用例は少なく、勅撰集では『風雅集』と『新統古今集』に一首ずつ見える。その他は伏見院の用例などが見える。●よその夕べ―【参考】に挙げた定家の歌を踏まえた表現。【補説】参照。●秋風―「秋」に「飽き」の意を響かせる。

【参考】「年もへぬ祈る契は初瀬山をのへの鐘のよその夕暮」(『新古今集』恋二・一一四二・藤原定家)

【補説】合点がないので自讃歌。「よそのゆふべ」は定家の第五句を踏まえたものであろう。「自分以外のよその男女が逢う夕暮」に吹く秋風には「飽き」を響かせて四季歌に恋的要素を存分に込めた。

## 江辺暁萩

一一七 とまりぶね波は音なき湊江になほ夢さそふ萩の上風

【合点】善成

【詞書】「江の辺りの暁の萩」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「萩にはわきて風の音するものなれば、先づその心をよめり。下萩、萩の上風、萩の上葉、萩の声、萩吹く風、庭の萩原などよめり。江辺を出たれば、其の風情をもとむべし。」とある。

【口語訳】停泊している舟の中では波の音は聞こえず、湊江にやはり夢にいざない眠りを誘う萩の上風が吹く。

【語釈】●とまりぶね―碇を下ろすなどして停泊している舟。●湊江―港になっている入り江。●夢さそふ―「暁」を「まはし」て詠んだ表現。

【参考】「夢さそふ風のやどりと成りにけり枕にちかき庭の萩はら」（『新統古今集』秋上・三六九・「貞和百首歌に」・藤原為明）

## 萩露

一一八 枝ながらながめむ露の玉ゆらもなほとどまらぬ萩の下風

【合点】良基

【詞書】「萩の露」。『為重朝臣詠草』（一七三番歌）康暦二年七月七日の歌会で出題。

【口語訳】枝についたまま眺めよう、美しい露がほんの少しの間もやはり留まることのない萩の下の方に風が吹く。

【語釈】●枝ながら―「ながら」はそのままの状態で、の意。露が枝に付いた状態で。【参考】古今歌を踏まえる。

●玉ゆら―ほんのしばしの間の意。「玉」は露の見立てであり、縁語。露の美しさを表現。

【参考】「萩の露玉にぬかむと取れば消ぬよし見む人は枝ながら見よ」（『古今集』秋上・二二二・読人しらず）

【補説】【参考】古今歌は露が玉であれば緒を通してゆつくり鑑賞するけれど、取ろうとすれば消えてしまうとい、当該歌ではこれを踏まえて、萩の葉に下風が吹くのでしばしもとどまることがないので、古今歌のように「枝ながら」眺めようという。

一一九 散らぬまも色なる露を吹く 風に花かと惜しむ野辺の秋萩

【合点】 為遠・善成

【詞書】 一一八番歌「萩露」題を受ける。

【口語訳】 散らないうちも萩の花の色をつけた露を吹く風に花ではないかと惜しく思う、野辺に咲く秋萩の花を。

【語釈】 ●花かと惜しむ―萩の花に置いた露に萩の花の色が移り露を花と見まがい、風が吹き露を吹き飛ばすと、花を吹き散らしたのではないかと惜しまれるという。

【参考】「我が宿の萩咲きにけり散らぬ間にはや来て見べし奈良の里人」（『万葉集』卷十・二二八七・秋相聞、『古今和歌六帖』第五・二八四五）

草花露

一一〇 のちも見<sup>み</sup>む風を待つ<sup>ま</sup>間のしら露にうつりなはてそ秋萩の花<sup>はな</sup>

【合点】 為遠

【詞書】 「草花の露」。

【口語訳】 のちも再び見よう。風が吹くのを待つ間を知らない、白露にその色を移してしまわないでおくれ、秋萩の花よ。

【語釈】 ●のちも見む―初句切れ。秋萩を露が吹き落とされた後も見たいという気持ち。●風を待つ間の―【参考】に挙げた本歌を踏まえた表現。●しら露―「しら」に「白（露）」と「知ら（ぬ）」とを掛ける。●うつりなはてそ―「白露」の「白」に秋萩の花の色を移すなよ。「な：そ」は禁止の表現。「うつりなはてそ」という例は当該歌以前では「残りける秋の日かずもあるものをうつりなはてそ庭のしら菊」（『続千載集』秋下・五六七・永福門院内侍）などがある。

【参考】 本歌「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」（『古今集』恋四・六九四・読人しらず）

露

一一一 宮城野や風を待つ<sup>ま</sup>間のつゆにだに小萩<sup>こはぎ</sup>が原<sup>はら</sup>ぞ色かはりゆく

【合点】 善成

【詞書】 「露」。堀河百首題。

【口語訳】 宮城野では風を待っているほんの少しの間とどまっている露にさえも、小萩が一面に生えた野原は色

が萩の花の色に変わってゆくのだよ。

【語釈】 ●宮城野や―陸奥国の歌枕。現在の宮城県仙台市に同地名が残る。「や」は地名を提示する間投助詞。

●つゆ―歌題の「露」と副詞「つゆ（ほんの少しの間、の意）」とを掛ける。●小萩が原ぞ色かはりゆく―「小萩が原」は一面に小萩が生えた野原のこと。「かはりゆく」は強意の係助詞「ぞ」を受けた連体形で係り結び。その色が次第に移り変わるとする。

【参考】本歌、一二〇番歌【参考】参照。

### 潤月七夕

一二三 年に待つふなでやいかに天の河文月のけふは又もきにけり

【合点】善成

【詞書】「潤月の七夕」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略) 閏月と出たるにはあふせなき事を詠ずるなり。」とある。

【口語訳】一年に一度の機会を待っている、天の川を渡るその船出はどのようなものであろうか、閏月で文月の今日七夕はまた(二度目)もやってきたよ。

【語釈】 ●年に待つ―「年に」は一年の間。「天の川遠き渡りはなけれども君が舟出は年にこそ待て」(『万葉集』卷十・秋雑歌・二〇五五)などの用例がある。●ふなでやいかに―「ふなで」は七夕が天の川を渡る事。「や」は疑問の意の係助詞。「いかに」は副詞で、どのように、の意。逢瀬はないのに、という意を含ませるか。

【参考】「七夕は文月の浪に舟出して天の川風今や待つらむ」(『嘉元百首』秋・一四二七・「七夕」・藤原俊光)

秋風満野

一一三 そことなき尾花の浪のよせかへりかたも定めぬ野辺の秋風

【合点】 善成

【詞書】「秋風、野に満つ」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「(略)秋のけしきあらしによりて、千種の色を吹きしをらる、軀を惜しみてよめるなり。此の古歌則此の題の大意なるべし。満といふ字よく心をつくべし。」とある。

【口語訳】そこだよということはないけれど、尾花が靡いて波のように寄せては返し、方向を定めることのない野辺の秋風であるよ。

【語釈】●よせかへり―尾花が寄せては返す波のように風に吹かれている。「浪」の縁語。●かたもさだめぬ―一定方向ではなく四方八方に吹き乱れる尾花を表現することにより、野辺に秋風が満ちていることを表し、歌題の「満」を「まはし」て詠んでいる。「かた」に波の縁語の「瀉」を掛ける。

【参考】本歌「風ふけば方も定めず散る花をいづ方へゆくはるとかは見む」(『拾遺集』春・七六・紀貫之)

野虫

一二四 常盤山すその原にうらむなり秋風すさむ松虫の声

【合点】 善成

【詞書】「野虫」。『千首』題。

【口語訳】常盤山の裾野の原で恨みに思っているのだな。秋風が吹き荒れるなか松虫の声が聞こえるよ。

【語釈】●常盤山—山城国の歌枕。現在の京都市右京区常盤にある丘の辺りを指す古称とされる。ここでは永遠に変わらないという意味を込めている。●裾野の原にうらむなり—「裾野の原」は山裾に広がる原。「裾（野）」に「（衣の）裾」を、「うらむ」に「（衣の）裏」を響かせ、恋人の姿を想起させるか。三句切れ。●秋風—「秋」に「飽き」を響かせる。●松虫の声—「松虫」の「松」に「（恋人を）待つ」を響かせる。

【参考】「忘らるるときはの山も音をぞ鳴く秋のの虫の声に乱れて」（『大和物語』百六段）

### 草虫

一二五 そのままに虫の音しげくなりけりはらはですぎし庭の夏草

【合点】善成

【詞書】「草の虫」。

【口語訳】以前あった前栽も繁ったそのまま虫の音も繁くなったなあ。その繁った草を払うことなく時が過ぎてしまった庭の夏草は。

【語釈】●そのままに—【参考】古今歌の詞書を受ける。●しげく—「（虫の音が）繁し」と「（夏草が）繁し」とを掛ける。●なりにけり—庭に繁った夏草の中から虫の音がしきりに聞こえるようになった事実を受け入れる。三句切れ。●払はで過ぎし—「秋ノ庭ニハ不レシテ掃携ニハテ藤杖ニ 閑ニ踏ニ梧桐ノ黄葉ニ行ク」（『和漢朗詠集』秋・三〇九・「落葉」・白居易）のように秋の庭を掃くことなく閑かに過ごす意が込められているか。

【参考】『古今集』（哀傷・八五三・三春有助）「君が植ゑし一叢薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」は次のような長文の詞書を載せる。「藤原の利基の朝臣の右近中将にてすみ侍りける曹司の身まかりてのち人も住ま

なりにけるを、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れければ、もとありし前栽もいと繁くあれたりけるを見て、はやくそこに侍りければ昔を思ひやりてよみける」

【補説】初句「そのままに」と下句は、【参考】古今歌の詞書にある「もとありし前栽もいと繁くあれたりける」を受けている。「払はで過ぎし」は【語釈】にも記したとおり、静寂を表す白居易の表現を取り込み、上句の「虫の音しげく」と対比する表現となっている。

右馬頭入道道源家にて、野径虫

一一六 わけ行(け)ばおなじあたりに鳴く虫もかぎりしられぬ武蔵野の原

【合点】 為重

【詞書】「右馬頭入道道源」は、『花宮三代記』永和元年八月二十五日条の幕府和歌会始に「沙弥道源」とあり、この右傍に「吉見右馬頭入道」と注記が見える。『大日本史料』では『花宮三代記』の「道源」を「氏頼」と注する。経氏の活動時期などを考慮し、氏頼を想定する。氏頼は生没年未詳。吉見頼隆の子。貞和四年(一三四八)ごろ能登の守護。応安三年(一三七〇)室町幕府引付頭人。歌題は「野の径の虫」。

【口語訳】わけ行ってみるといつも同じ辺りで鳴いている虫も、その場所の限りが分からないほど広い武蔵野の原だよ。

【語釈】●かぎりしられぬ武蔵野の原―「武蔵野」は武蔵国の歌枕。広義には関東平野全体を、狭義には現在の東京西部、府中の多摩川から川越の入間川に囲まれた部分を指す。「武蔵野は月のいるべき峰もなし尾花が末にかかる白雲」(『続古今集』秋上・四二五・「建保三年内裏の歌合」・源通方)のように広大な武蔵野の平原が広がって

いる様子を表現。

【参考】「ゆけど猶はてこそなけれ迷ひこし恋路の末や武蔵野の原」（『頓阿百首A』六八・「寄原恋」。「わけゆけばさまざまに鳴く虫の音もはてこそなけれ武蔵野の原」（『キヤウ内侍集』六五・「野径虫」、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』明治書院によれば『キヤウ内侍集』は姉小路基綱女卿内侍済子の歌集である可能性が指摘される）。

### 鹿

一一七 山鳥の尾上へだつるつまごひに長き夜すがらしかぞ鳴くなる

【合点】 善成

【詞書】「鹿」。堀河百首題。『为重朝臣詠草』（二一〇）康暦二年八月十二日歌会で出題。

【口語訳】山鳥の長い尾が尾上を隔てて恋しいあの人を慕う、その長き終夜、鹿がはつきりと鳴いている。

【語釈】●山鳥の尾上―「山鳥の）尾」と「山の）尾上」とを掛ける。「長き」を導き出す。●しかぞ鳴くなる―歌題の「鹿」と「しか（確と）」とを掛ける。強意の係助詞「ぞ」と鹿の声という聴覚により状況を把握するという意を持つ「なり」の連体形で係り結び。

【参考】「山鳥の尾上の鹿のおのれさへ隔つる中につまよこふらん」（『草庵集』秋上・五〇〇）

一二八 おのがつま松吹（く）風にたぐふなりくるる山路のさをしかの声

【合点】 善成

【詞書】一二七番歌「鹿」題を受ける。

【口語訳】自分の恋しい相手を待つのと、松を吹く風に相まっているのだな。暮れていく山路で小牡鹿の音が聞こえる。

【語釈】●おのがつま―鳴いている小牡鹿が相手を恋うこと。●松吹く風―「松」と「待つ」とを掛け、恋人の訪れを待つがやっこない寂しさを松吹く風に込める。●たぐふなり―「たぐふ」は添うの意。小牡鹿のつま恋の哀愁を帯びた声が「松吹く風」の音と同時に発生している。三句切れ。

【参考】「奥山の松吹く風にたぐひきて軒ばに近きさを鹿の声」(『新葉集』秋上・二九〇・入道前関白左大臣〈藤原教基か〉)

一二九 秋風につれなき色やならふらんつままつ山にしかぞ鳴くなる

【合点】 為重

【詞書】 一二七番歌「鹿」題を受ける。

【口語訳】秋風が吹き、様変わりしていくつれない様子にならったのだろう。恋しいあの人を待つ松山で鹿が鳴いている。

【語釈】●秋風―「飽き」を響かせる。●つれなき色やならふらん―「松ならでつれなき色とみゆるかな冬の林に降れる白雪」(『龜山院御集』秋・五九)などのように変化する色や様子を表す。「つま」の心変わりの意も込める。疑問の係助詞「や」に「ならふ」の連体形で係り結び。三句切れ。●まつ山に―「松山」は松が多く生い茂る山。「まつ」に「松」と「待つ」とを掛ける。「に」は場所を表す助詞。●しかぞ鳴くなる―一二七番歌【語釈】参照。

【参考】「秋風の吹きぬる野辺になく鹿は色かはり行く妻やこふらん」(『藤葉集』秋・二〇七・「秋歌中に」・近衛家基)

## 野径鹿

一三〇 旅人の行(き) 来もしらず鳴く鹿の声はるかなる武蔵野の原はら

【合点】 なし。

【詞書】 「野の径の鹿」。『夫木抄』(秋三・四八四四・従三位忠兼卿)に「野径鹿、古来歌合」と見える。他、『光経集』(五三三)に見える。

【口語訳】 旅人が往来するのも知らないで鳴いている鹿の声が遙か遠く、広い武蔵野の原に聞こえる。

【語釈】 ●はるかなる―鹿の鳴き声が遙か遠くから聞こえるという意と広大な武蔵野の平野が遙か遠くまで広がっているという意を込める。●武蔵野の原―一二六番歌【語釈】参照。

【参考】 「めぐりあはん空行く月の行末もまだはるかなる武蔵野の原」(『拾遺愚草』一八五五・「野径月」)「旅人の袖うち払ふ秋風にしをれて鹿の声ぞ聞ゆる」(『後鳥羽院御集』一四六〇)

## 秋夕

一三一 秋の色のむなしき空にわが心こころいかにそめぬる夕なるらむ

【合点】 良基

【詞書】 「秋の夕べ」。『為重朝臣詠草』(一九三番歌) 康暦二年七月二十六日で出題。

【口語訳】 秋の気配の、何もない空のように空虚な私の心をどんなにか深く色を染め、思いを寄せ始めた夕べなのだろう。

【語釈】 ●秋の色―秋のけはいのこと。●むなしき空―何もない空。虚空。私の虚無な心を表現。●いかに―感

嘆の意の副詞で解釈した。●そめぬる―「染め」は下二段動詞の連用形で夕陽の色を染める、と（心を）深く寄せるの両意。「ぬる」は起動相の意を持つ助動詞「ぬ」の連体形。深く心を寄せ始めた。●夕なるらむ―「なるらむ」は断定の助動詞「なり」の連用形に現在推量の助動詞「らむ」が接続。

【参考】「夕暮れはいかなる色のかはればかむなしき空に秋のみゆらん」（『続古今集』秋上・三六四・藤原教家）

## 待月

一三二 月にうき物とは見えずいでやらぬ光をうつす山の端はの空

【合点】 為重

【詞書】 「待つ月」。

【口語訳】 煩わしいものとは思えない。すっかり出きらない月の光をうつす山の端の空を。

【語釈】 ●月にうき物とは見えず―「うき物」は、「（月が空に）浮き」と「憂き」とを掛ける。月に対して厭わしいものとは思わない。三句切れ。●いでやらぬ―月が山の端からすっかり出ることなく。

【参考】 「山の端を出でやらぬよりかげ見えて松の下照る十六夜の月」（『玉葉集』秋下・六三二・藤原良教）

【補注】 月影をうつすだけで、月の姿を見せない山の端の空をいとわしくは思わない、とする。その理由は月を待っているからである。歌題の「待つ」を「まはし」て詠んでいる。

一三三 月待つと高嶺たかねの雲をいとふまとに外山とやまのよそは影ぞさやけき

【合点】 良基

【詞書】一三二番歌「待月」題を受ける。

【口語訳】月の出を待っていると高嶺にかかっている雲を厭わしく思う、その間に外山から遠いところは月の光がはつきりとしている。

【語釈】●高嶺の雲―高い峰に懸かる雲。●外山のよそは―「外山」は人里に近く山からは遠いところ。「よそ」はかけ離れたところ。●影ぞさやけき―「影」はここでは月の光。「さやけし」は月の光が澄みきってすがすがしい様子。係助詞「ぞ」を受け連体形で係り結び。

【参考】「秋の月高嶺の雲のあなたにて晴れゆく空のくるるまちけり」（『千載集』秋上・二七五・藤原忠通）

### 月出山

一三四 いつのまにかへる尾上おのへの雲きえて暮くるれば月の澄すみのぼるらん

【合点】なし。

【詞書】「月、山を出づ」。

【口語訳】いつの間にか帰る尾上の雲が消えて、夕暮れになると月が澄んで昇るだろう。

【語釈】●いつのまに―「雲きえて」に掛かる。●かへる尾上―「尾上」は山の高い頂。「かへる」の主語は月。

●暮るれば―「暮る」の已然形に順接の接続助詞「ば」で夕暮になるとかならず、の意。

【参考】「待ちいでぬ麓の里もなかりけり尾上の月や澄みのぼるらん」（『草庵集』秋上・五一八）

月

一三五 今夜さへいづくにくもるかげならむ月のよそなる雲の一むら

【合点】 為遠・善成・耕雲

【詞書】 「月」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（二二一）の康暦二年八月十二日歌会で出題。

【口語訳】 今夜でさえもどこで曇っている光だというのだろう。月とはかけ離れて一叢の雲が浮かんでいる。

【語釈】 ●今夜さへ―「さへ」は添加の意。【詞書】に記したように経氏が康暦二年八月十二日の歌会で詠んだとするならば、「今夜」は「十五夜ではない今夜までも」の意となるか。●かげならむ―「む」は推量の助動詞の終止形で三句切れ。●月のよそなる―月とは遠く離れている。

【参考】「葛城や高間の山の花ざかり雲のよそなる雲を見るかな」（『千五百番歌合』春三・二百六番・左・四二一・有家）

一三六 さそはれて月にかかれる浮雲もやがて晴れゆく夜半の秋風

【合点】 花町・耕雲

【詞書】 一三五番歌「月」題を受ける。

【口語訳】 月にかかっている浮き雲も、夜半に吹く秋風に誘われてすぐに晴れてゆくのだなあ。

【語釈】 ●さそはれて―浮雲が秋風に誘われて、の意。「やがて晴れゆく」に掛かる。

【参考】「心こそ行方も知らね秋風にさそはれ出づる月をながめて」（『続後撰集』秋中・三三二一・「月の歌の中に」・藤原秀能）、「村雨のやがて晴れ行く山風に曇りもはてぬ月ぞさやけき」（『拾藻抄』二五三）。

【補説】朱書きで集付「新後拾遺」と記される。『新後拾遺集』秋上・三六〇番歌、月歌群に入集。

八月十五夜

一三七 今宵<sup>こよひ</sup>しも更<sup>ふ</sup>けてさやけき月影<sup>つきかげ</sup>にげに中空<sup>そら</sup>の秋ぞしらるる、

【合点】なし。

【詞書】「八月十五夜」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】十五夜の今宵に限って更けては清かに光る月の光に、まことに仲秋の名月であるすばらしい秋だと分かるのだ。

【語釈】●今宵しも―「しも」は八月十五夜という宵をとりたてていう。●中空の秋―「中空」は空の中ほどの意であるが、「中」に月の半ば、仲秋の意を響かせる。●秋ぞしらるる―強意の係助詞「ぞ」と自発の意の助動詞「る」の連体形で係り結び。

【参考】「月はなほ中空高く残れども影薄くなる有明の庭」(『風雅集』秋下・六三三・藤原経顕)

深夜月

一三八 更<sup>ふ</sup>けぬとは又おき出でて見る月<sup>つき</sup>の影にもしるき夜半<sup>よは</sup>の空かな

【合点】為遠

【詞書】「深き夜の月」。

【口語訳】夜が更けたのだということとはまた起きて出でて見る月の光にもはっきりと分かる夜半の空であるよ。

【語釈】 ●夜半の空―例えば「明けぬとも猶おもかげに立田山恋しかるべき夜はの空かな」（『拾遺愚草』二見浦百首・山・一九二）のように月がかかっている空。

【参考】「世に知らぬ夜半の空かな秋毎にさゆるは月のならひなれども」（『長秋詠藻』中・二四四）

関路月

一三九 逢坂の関せきの清水しみずにやどりきて空行くうぎやう（く）月も影ぞやすらふ

【合点】 なし。

【詞書】 「関路の月」。

【口語訳】 逢坂の関の清水に宿つてきて空を行く月もその光をとどめる。

【語釈】 ●逢坂の関の清水―「逢坂」は近江国の歌枕。「関の清水」は逢坂の関にある湧き水。●空行く月―空を渡つてゆく月。●影ぞやすらふ―「やすらふ」はしばらくとどまる。「ぞ」を受けて連体形となり係り結び。

【参考】「逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月の駒」（『拾遺集』秋・一七〇・紀貫之）。

野月

一四〇 旅寝よねする涙にやどれ夜半よはの月野原つきがはらの露は秋風あきかぜぞ吹く

【合点】 善成

【詞書】 「野の月」。『千首』題。

【口語訳】 つらい旅寝で流す涙に宿っておくれ、夜半の月の光よ。野原の露には秋風が吹いて留まってくれない

から。

【語釈】●涙にやどれ―「やどる」の命令形。「夜半の月」に対していい、下句と倒置の関係。●野原の露は―野原の露は秋風によって吹き飛ばされてしまい、月の光を留めてはくれないので、と上句を説明する。●秋風ぞ吹く―強意の係助詞「ぞ」と「吹く」の連体形で係り結びとなり、露を吹き飛ばしてしまう秋風を強める。

【参考】「旅寝する野原秋風身にしめて面影さらぬ故郷の月」（『後鳥羽院御集』一六三六）

#### 海辺月

一四一 ながむとて塩汲みたゆむ袖をだにほさでやあまの月やどすらむ

【合点】 為遠

【詞書】 「海の辺りの月」。

【口語訳】物思いにふけりぼんやりと塩汲みを怠っている袖でさえも干さずにいる海士の袖には、涙で濡れて月を宿すことだろう。

【語釈】●ながむ―物思いにふけり、涙を流し袖を濡らすことを想起。●たゆむ―緊張がゆるむこと。ここではぼんやりとして塩汲みを怠るさま。

【参考】「中中に塩汲みたゆむ海士人の袖やほすらん五月雨の比」（『壬二集』一二六九）

一四二 松浦瀉更けてかたぶく月影になほもろこしの人や待つらむ

【合点】 善成

【詞書】一四一番歌「海辺月」題を受ける。

【口語訳】松浦潟では夜が更けて、すでに傾いている月の光にそれでも遠い異国の地の人を待つのだろう。

【語釈】●松浦潟―肥前国の歌枕。現在の佐賀・長崎両県の北西部。外国へと開かれた土地である。「松（浦）」に「待つ」を掛けることが多いが、ここでは第五句の「待つ」を導く。●もろこし―中国大陆の意。「はるかかなるもろこしまでもゆく物は秋のねぎめの心なりけり」（『千載集』秋下・三〇二・大弐三位）のように遠い場所を表す。

【参考】「もろこしの山人今は惜しむらん松浦が沖の明け方の月」（『新千載集』秋上・四五三・「和歌所歌合に、海辺月を」・後鳥羽院）

## 江月

一四三 漕こぎかへる堀江ほりえの小舟をぶね心せよさす夕しほに月やどるなり

【合点】為重

【詞書】「江の月」。『千首』題。

【口語訳】堀江を漕いで帰ってくる小舟は気をつけなさいよ。棹さす夕潮には月が宿っているのだから。

【語釈】●堀江―堀割や運河などのように人工的に作った川のこと。ただし「おしてる難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに」（『万葉集』秋雜・二二三五）とあるように難波の名所として詠まれる。●心せよ―「心す」の命令形で三句切れ。●さす―舟の縁語で棹をさすの意。●夕しほ―夕方になって満ちてくる潮。

【参考】「堀江漕ぐたななしを舟こぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ」（『古今集』恋四・七三三・読人しらず）

一四四 三島江みしまえや蘆あしの末葉すゑの露つゆながら落ちおちても水みづに月つきぞうつろふ

【合点】 善成

【詞書】 一四三番歌「江月」題を受ける。

【口語訳】 三島江では蘆の末葉の露となつて光り、落ちても水に月の光が移り映えている。

【語釈】 ●三島江や―撰津国の歌枕。現在の大阪府高槻市南西部にある。「や」は地名を提示する助詞。●うつろふ―「うつろふ」は「移る」の意と「映る」の意とを掛ける。月の光が移りゆき蘆の葉の露を光らせながら三島江の水面に落ち移つて映えている様子。

【参考】 「月影をそれかとばかり三島江のたまえの水はこほりしにけり」〔『明日香井集』六〇四〕

### 渡月

一四五 里人さとびとや今宵こよひの月つきにあくがれて宇治うぢの渡りわたの舟ふねよばふらむ

【合点】 善成

【詞書】 「渡りの月」。

【口語訳】 里にいる人は今宵の月に心ひかれて宇治の渡りで舟を呼んでいるのだろう。

【語釈】 ●里人―宇治の里人。●今宵の月―配列から見て八月十五夜を詠んだものと考え。●あくがれて―心ひかれて。【補説】 参照。●宇治の渡り―「宇治」は山城国の歌枕。【補説】 参照。●舟よばふらむ―舟を呼ぶ。

【補説】 参照。

【参考】 「宇治川は淀瀬なからし網代人舟呼ばふ声をちこち聞こゆ」〔『万葉集』卷七・一一三五・「山背にして作りき」〕、

「宇治川の川瀬も見えぬ夕霧に槇の島人舟よばふなり」(『金葉集』二度本・秋・二四〇・「河霧をよめる」・藤原基光)  
 【補説】宇治は霧の名所であり、「今宵の月に」憧れるものの、【参考】『金葉集』歌のように月の光が霧に紛れ、舟を呼ぶ声という聴覚を頼りにしているという。

八月十五夜、人々来(たり)て、題を探りて歌よみ侍りしに、むらさめ村雨の後、月いとくまなく侍りしに、  
 河月といふ事を

一四六 堀川の瀬々にやどれる月かげもふたたびすめる村雨の空

【合点】なし。

【詞書】八月十五夜に人々がやって来て探題歌会を行った折、村雨が降った後、月が非常に澄んでいたので、「河月」という題でよみました。「河の月」は『千首』題。

【口語訳】堀川の瀬々に宿っている月の光が、村雨の止んだ後も再び澄んでそこに住んでいる村雨の空に。

【語釈】●堀川―京都市の市街地中央部を南北に流れる川。平安京造営に際して開かれた。●ふたたびすめる―「ふたたび」は【参考】に示した円融帝が二度の内裏焼亡の際に堀河院仮御所としたことを踏まえる。「すめる」は「(月が)澄む」と「(帝が)住む」とを掛ける。●村雨の空―村雨が降り出す空。ここでは詞書にあるように村雨の後に澄んだ月が出たことを踏まえる。

【参考】「水上にさだめてければ君が代にふたたびすめる堀川の水」(『詞花集』雑下・三八五・「円融院御時、堀河院にふたたび行幸せさせ給けるによめる」・曾禰好忠)

## おなじ心を

一四七 幾瀬をかまだ夜深きに過ぎぬらん月に出（で）ぬる淀の河舟いぐせ ぶか よど ぶね

【合点】 善成

【詞書】「おなじ題の心をよみました」。一四六番歌「河月」題を受ける。同日の探題であったかは不明。

【口語訳】いくつの瀬を、まだ夜も深いのに過ぎてきたのだろうか。月と共に舟出した淀の川舟は。

【語釈】●幾瀬—いくつかの浅瀬。●まだ夜深きに—まだ夜が明け果てない時間帯をいう。【参考】忠見歌の第五句を踏まえる。●淀の河舟—山城国の歌枕。【参考】忠見歌の詞書にある淀の渡りの屏風絵を想起させる。

【参考】「いづ方に鳴きてゆくらむ郭公淀の渡りのまだ夜深きに」（『拾遺集』夏・一一三・「天曆御時御屏風に、淀の渡りする人かける所に」・壬生忠見）

一四八 旅寝する月も秋津の川の瀬にこほりをむすぶ波枕かなあきつ かは せ まくら

【合点】 良基

【詞書】一四六番歌「河月」題を受ける。

【口語訳】旅寝をしていると秋津の川の瀬に月の光が差し込んで、波枕もまるで氷を結んでいるかのようだ。

【語釈】●秋津の川の瀬—大和国の歌枕。「み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり見む」（『万葉集』雑・九一一）より吉野川のことを「秋津の川」とするかとされる。●こほりをむすぶ—月光のきらめきが冷たく射すようであり氷のようであるという。●波枕—浪を枕にするという水辺の旅寝を表すが、ここでは枕のような波と解したい。その波枕が月の光によって氷のように固まって見える。「枕」は旅の縁語。

【参考】「絶え絶えの浮き寝の水に結ぶ夜は氷も浪の枕をぞする」(『壬二集』一六三・冬)

## 松間夜月

一四九 雲ならぬおのが木(の)間もうちなびき月影もれと松風ぞ吹く

【合点】なし。

【詞書】「松の間の夜の月」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「松の木のまよりもりくる月の景気をよむべし。夜の字たゞむすばれたるばかりなり。(略)」とある。

【口語訳】雲ではなく、松の木の間からも靡き、月の光よ、漏れよ、と言わんばかりに松風が吹いているよ。

【語釈】●雲ならぬ―月の光が雲から漏れるのではなく。●おのが木の間もうちなびき―「おのが木の間」は歌題の「松間」を詠んでいる。松の木の隙間から風に吹かれて月の光をまるで靡かせているようだと詠む。●月影もれ―雲からではなく松の木の間から月の光が漏れるように。「もれ」は「漏る」の命令形。月影を詠むことで「夜」は題詠でいうところの「必ずしも詠まざる文字」となる。●松風ぞ吹く―松風が月の光を漏らすように吹いている様子。

【参考】「雲ならぬ涙もはらへ秋の風こよひばかりの月をだにみん」(『拾玉集』「月前恋」・四二二)

一五〇 音だにも心ぞすめるよもすがらもる月みがく軒の松風

【合点】善成

【詞書】一四九番歌「松間夜月」題を受ける。

【口語訳】軒の松に吹く風は、これによつて奏でられた音を聴いただけでもずっと心が澄んでいる。さらに夜通し、松の枝から漏れる月の光を磨いている。

【語釈】●音だにも―松を吹く風の音。松風は琴の音を表す。なお【補説】参照。●心ぞすめる―強意の係助詞「ぞ」、「澄む」の已然形「澄め」にある状態が起こつた時から継続している状態化辞「り」の連体形で係り結びとなり、二句切れ。音を聴いた時からずっと心が澄んでいる。

【参考】「あまつ風氷を渡る冬の夜のをとめの袖をみがく月影」（『新勅撰集』雑一・一一一・式子内親王）

【補説】式子内親王歌のように、月影が氷や袖を磨くとする詠歌は新古今時代に多く見られるが、当該歌は松風が月の光を磨くとする点に特徴がある。

以下、『源経氏歌集』四季部注釈稿（下）に続く。